



## 中井宏二 弁護士

新65期 37歳 大手前ノーベル法律事務所 元読売新聞記者

大阪大学文学部日本史学専攻卒。歴史学者を夢見ていました。

卒論は明治維新。東京遷都前、大久保利通が大阪に首都を遷そうとした動きについて。

しかし、歴史好きと学問の違いに気付き、研究者の道も狭き門である現実から、就職活動を始めました。就職先はどこでもいいと思っていましたが、ある全国紙で最終面接まで残り、記者ならいけるかもと…。結局、出身地香川県の地元紙四国新聞に入社しました。

校閲を半年した後、警察司法担当として、主に所轄署での事件事故の取材や、裁判所での新件チェックなどをしました。

1年半後、読売の記者から誘われて読売新聞に変わるようになりました。

\* \* \* \*

初任は鳥取県の米子支局。県西部全域の警察、司法、行政、自衛隊などすべてを支局長と私の2人で担当しました。鳥取県西部地震の直後に赴任し、2年間、被災者の取材のほか、新生児連れ去り事件等の多くの刑事事件を経験しました。

次に和歌山支局で2年半。遊軍としてデスクの下で後輩に取材の指示や原稿の集約などもしました。毒物カレー事件の一審判決直前に赴任し、主に被害者遺族担当として控訴審判決まで取材しました。

JR 福知山線脱線事故の直後に現場のある阪神支局に。1年間、被害者取材やクボタのアスベスト問題にかかりました。

最後は、大阪本社社会部で約2年勤務しました。

ロースクールは在職中に受験して京都大へ。入学前日に読売新聞を退職し、未修5期生として3年間学びました。

記者として、警察や司法の担当が長く、検事や弁護士に取材する機会も多かったのですが、事件に直接かかわれる検事や弁護士の仕事に魅力を感じて

いました。

反面、検事や弁護士からの二次情報を追いかける記者の限界も感じていました。

私が体調を崩して約1か月入院したことも大きな動機になりました。法曹の仕事が楽に見えたというわけではな





いのですが、激務である記者をこのまま続けられるのかなという不安もあったのです。

身近にいた法曹に魅力を感じていたところに、法科大学院ができて、法曹への思いは募りました。最後は私の思いを知っていた妻に背中を押してもらいました。妻も記者をしていて収入面の不安は幸いなかったです。

もう一つ大きな要素は、ほぼ同じ経歴をもつ法科大学院1期生の水谷恭史先生が司法試験に合格したとの話を聞いていたことです。私もローに行けば法曹になれると心強く思いました。

合格前は、合格者が増えることはいいことだと思っていました。いろんな職業の人も法曹にという理念に共感しましたし、自分が行かずに誰が行くのかと。でも今、合格者3000人は現実的ではないと感じます。もっとも、合格者の数と質の低下は別ではないでしょうか。

これまで、真摯に仕事に取り組む方もたくさん見てきましたが、弁護士の資格に胡座をかいて、首をかしげざる

をえないような仕事ぶりの方もたくさん見てきました。

就職難が問題視されますが、そもそも合格者全員が就職する必要があるという前提は疑問です。このような論理が通る職業はありませんし、社会に受け入れられません。

弁護士になってからは、人数が多い、食べていくのが切実な問題ということにはよくわかるのですが…。

\* \* \* \*

登録してまだ3か月余りなので、弁護士としての経験はまだありません。

記者時代、悩みを抱えている方からよく会社に電話がありました。記事にできるのは社会問題になる事柄だけで、電話の方の個人的な悩みは記事では解決できません。警察や弁護士に相談に行くよう助言するだけということが何度もありました。しかし今は、自分で聞いてあげて解決のお手伝いができる。良い仕事に就いたと思う時です。

もっとも、人に振れない分、責任は重い。どんな事件でもその人の人生がかかっているのであり、自分の存在意義を感じることができません。

\* \* \* \*

取材する側から取材される側になりました。弁護士も、ひとつの小さな課題を社会運動にすることが必要な場面があると思います。その時に、どこに記者の関心があるのか、世間がどう感じるのか、といったことについて敏感にならなければなりません。記者としての経験を生かし、マスコミとの橋渡しや共同作業ができればと思っています。

\* \* \* \*

地方紙記者の友人は紙面に書くだけでなく、組織を離れてインターネット等で自分の伝えたいことを発信しています。私は新聞社に戻ることはできませんが、一人の書き手として、様々な媒体を使って社会への問題提起もしてみたいですね。

弁護士会の社会活動は、ワンテンポ

遅い感じがします。大規模な環境汚染・健康被害問題、被害者が多数に上る事故事件など、これまでは個々の弁護士が手弁当で支援活動をしていましたが、会として大々的に動くことはできないのでしょうか。

会には個々の会員の経験という財産がある上、会員も増えて機動力もあるはず。待ちの姿勢ではなく、勇み足でも問題に首をつっこむ姿勢も必要ではないでしょうか。世間は弁護士が何者であるかを知りません。個人だけでなく、会としての仕事ぶりを多くの人に見てもらいたいところが、身近に弁護士を感じてもらいたい第一歩だと思います。

弁護士として刑事は未経験です。事件報道は当局寄りだと批判されますが、記者は警察発表だけでなく、被疑者の話も聞きたいと常に思っています。しかし、マスコミ対応を嫌う弁護士は多い。依頼者の了解の上でマスコミを利用して被疑者の主張を正しく社会に訴える取り組みも必要ではないかと思えます。

弁護士のマスコミに対するアレルギーを減らすため、お互いの誤解が解けるような交流の場も欲しいですね。

